

流山稲門会

【交譲葉】俳句の会 報告

令和六年五月句会（第一四四回）

兼題 「葉桜」

開催日 令和六年五月二十五日

開催場所 生涯学習センター

出席者 七名

投句者・選句者 七名

（六 点 句）

●葉桜の道ゆったりと車椅子

夢心

選評：桜の花が散り、蕊も降って、今は葉桜となつた道を、車椅子に乗った人がゆったりと葉桜を見ながら逍遥している。恐らくその人は、満開の桜を見る多くの人達の邪魔にならぬよう又、憐憫の目で見られる事を避け、今、満開だった桜を想像しながら葉桜を楽しんでいるようだ。詠み人の優しい心情が窺がわれる佳句だ。（徹心記）

（四 点 句）

●爛漫も葉桜も好きこの街も

小牧

選評：作句者は草花や木々の芽吹きと開花のこの季節感を体いっばいに表していることがこの句から感じられます。そんなこの季節が大好きなのでしよう。季節の移ろいの中に於いて春爛漫を与えてくれる住む街も愛して止まないのではありません。なんとも言えないとても綺麗な句です。

（互 酬 記）

●木造りの展望台や風青し

玄鳥

選評：『風青し』の一言で、展望台に上がり、思いがけない眺望に目を見張り、新緑の山を撫で吹いてくる清々しい風を楽しんでいる様子などが想像されます。季語選びの大切さや思いを季語に託す潔さなどを改めて教えていただきました。

（寿 歩 記）

●葉桜に来年復ねと呟きぬ

徹心

選評：作者は桜の花ではなく、花の散った後の若く緑に輝く葉に呟いたのでした。桜の木の一年間

をどのように把握するかで、桜の木の見方を教わったような気がします。花と緑の他に、作者は何に興味を示すのか、楽しみです。（艸寛記）

（一 二 点 句）

葉桜の揺れて青空見え隠れ

寿歩

緑なす樹々に密やか要塞跡

小牧

解体の重機の響き薄暑かな

夢心

桜ショーエピソードには蕊降りぬ

徹心

目を取りて食せよと言うホタルイカ

小牧

逆回り蜥蜴静かに睨みをり

寿歩

（一 点 句）

葉桜の声援背にし運動会

艸寛

葉桜やベンチに憩う二人かな

夢心

葉桜や忘れられゆく千のかほ

玄鳥

跪き箆籬いっばいれんげ草

互酬

靄に濃き沈丁の香や門を出づ

小牧

（投 句）

散り桜褥にすやすや三歳児

徹心

葉桜の本末転倒それも良し

互酬

壇ノ浦平家の兵船散り桜

徹心

草笛の音色聴き分け葉を探す

艸寛

葉桜や葉脈透かし影深し

寿歩

百千鳥溶岩（らば）の埋もる桜島

玄鳥

甘く濃き若筍の苾京の味

艸寛

アンケート胡瓜の種のおまけ付き

互酬

いちごジャムこの甘さこそ母の味

艸寛

たつぷりの藤の魔力か鎧ぬぐ

寿歩

青嵐苗田の水面波立たせ

夢心

柿若葉間隙にある余白かな

互酬

高校のフェンスの網に青嵐

玄鳥

『句会後記』

今回ちょっと驚かされたことがあった。私事だがユニークな視点であり、自分には作ることができないと感心して秀句にした。しかし作者の意図とは全く別物だった。十七文字 俳句の面白さの「つだろう」と思いつつ、十年以上やっていて今さらこんなことを書くのも反省しきりである。でも楽しい句会でした。（小牧記）